集団への適応が困難な小学 2 年生の児童に対して、工夫した教材を提供しながら、ペア学習やグループ学習を取り入れた実践事例

１．事例の概要

Ｂ小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している２年生のＡ児が、通常の学級での交流及び共同学習を行っている事例である。Ａ児は、語彙が少なく、一語文で話すことが多い。うまく気持ちが伝わらず、途中であきらめたり、その後の学習に取りかかれなかったりすることがある。学年相応の学習が可能であるが、字の形を整えることが難しかったり、読み飛ばしがあったりする。鉛筆も握り持ちして書くことが多い。

保護者と合意形成を図りながら、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、評価・修正をしながら指導・支援を行った。ビジョントレーニングや聞き取り学習、ソーシャルスキルトレーニング、具体物を使った数の学習などを行った。

さらに、交流及び共同学習では、交流学級担任も含めた学年集団で研究会を設け、Ａ児の特性を把握し、適切な合理的配慮について検討した。特に算数科に重点をおいて取り組み、ペア学習やグループ学習を取り入れ、小集団の中で安心して発言することができるようにした。また、三角鉛筆の使用、座席配置の配慮、ワークシートやヒントカードの利用、具体物を使った教材の工夫などを行い、Ａ児が学習に意欲的に取り組めるようにした。

キーワード　ペア学習、グループ学習、ソーシャルスキルトレーニング

２．児童の実態

Ａ児は、Ｂ小学校の小学校２年生である。多動や暴言がみられ、入学時から自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している。入学時は、注意集中が続かず、20 分程度しか座っていることができなかったり、大きな集団での学習場面では思っていることを最後まで話し通すことができなかったりした。勝ち負けにこだわることがあり、負けると泣き出して教室の隅にうずくまることがあった。また、鉛筆を握って持ったり、音韻意識が弱く、ひらがなと「音」が一致していない部分があったりした。一の位の数と十の位の数の量の違いが区別できず、暗算が苦手だった。

３．本事例に関する基礎的環境整備

○　Ｂ小学校のあるＣ市には、発達障害者支援センターがあり、障害のある幼児と保護者を対象にした相談や、特別支援学校にも協力依頼して巡回教育相談を実施している。【基礎１】

○　Ｂ小学校では、特別支援教育に関する専門性をもつ自閉症・情緒障害特別支援学級担任、通級指導教室担当教員、知的障害特別支援学級担任の３名がコーディネーターに指名され、校長のリーダーシップの下に、特別支援教育を推進している。【基礎２】

○　大型テレビが設置されており、教育番組のデジタルコンテンツや算数のデジタル教科書、教員自作のパワーポイント教材を大きく映し出せる環境がある。【基礎４】

○　個別の指導計画に基づき、特性に応じた指導として、週１時間、自立活動の時間に、

教育番組を利用してソーシャルスキルトレーニング（以下「ＳＳＴ」という。）を行ったり、毎朝、目の体操（ビジョントレーニング）を繰り返し実施したりしている。【基礎７】

○　Ｃ市では、各学校で交流及び共同学習を積極的に推進している。Ｂ小学校では、インクルーシブ教育研究会をつくり、特別支援学級担任と交流学級担任が、交流及び共同学習の目的や内容について、「交流及び共同学習打合せ記録」や週案を使って打合せや日々の記録をとっている。【基礎８】

４．合意形成のプロセス

Ａ児の保護者が、「落ち着きがなく、話を聞けない、乱暴な行動が見られる、言葉が少なく発音に誤りがみられる。」などを気にして、就学相談を受けた。その結果、Ｃ市就学指導委員会より、「自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍し、特性に応じた指導を受けた方がよい」と勧められ、保護者が同意し、Ｂ小学校自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍した。保護者とは、「落ち着いて学習に集中できるようになることや、ことばを増やし、正しい発音ができるようになること、基礎的学力をつけること、さらに、通常の学級の他の児童とも触れ合えるように交流及び共同学習を実施すること。」を話し合った。

５．合理的配慮の実際

○　Ａ児は、手先が不器用で、鉛筆を握って持つことが多く、字の形も整わなかったことから三角鉛筆を持って書くようにした。【合理①－１－１】

○　画数が多い漢字はとらえるのが難しかったため、視知覚を高めるためのビジョントレーニングに取り組んだ。特別支援学級の朝の会に組み込み、なるべく毎日取り組むようにした。【合理①－１－１】

○　小さな文字を書くのが苦手なため、マス目の大きなノートを利用したり、書く量を減らしたワークシートを準備し、キーワードだけ記入するようにしたりした。【合理①－２－１】

○　交流及び共同学習において、ペア学習やグループ学習を取り入れ、学級全員の前でいきなり発表するよりも、はじめに仲の良い友達と話をすることで、自分の考えを整理するようにした。【合理①－２－２】

○　Ａ児が安心して交流及び共同学習に参加できるように、交流学級担任が肯定的な声掛けを行うように努めた。算数科ではゲーム的活動も取り入れ、児童同士が、言葉を掛け合い、楽しく活動できるようにした。【合理①－２－３】

６．本事例の成果と課題

取組の成果として、Ａ 児は、自閉症・情緒障害特別支援学級を安心できる場としつつ、交流学級で様々な学習や経験をし、人間関係を少しずつ広げてきていることが挙げられる。